開催にあたり　敬愛大学総合地域研究所 オンラインシンポジウム2022

戦争と私たちの暮らし

敬愛大学国際学部 特任教授
髙田　洋子

ご視聴の皆さま、こんにちは。敬愛大学特任教授の髙田洋子です。本日は平和をめぐって自治体が果たす役割を考えるシンポジウムを敬愛大学総合地域研究所で開催するに当たりまして、まず私たちの暮らしの中で戦争にどう向き合うのか、本学での経験を踏まえてお話しさせていただきます。よろしくお願いします。

私は、1952年、長崎市に生まれました。小学校時代は、爆心地から500メートルの城山小学校で学びました。そこで受けた平和教育というものが、私の原点であると考えております。専門は、フランス植民地期のベトナム経済史研究です。本学では国際関係論、東南アジア、また、東南アジアと日本の関係等について講義してきました。

ベトナムではメコンデルタ、紅河デルタ、多数の農村調査を経験しました。教室で学生にベトナム戦争を教える際には、知識の共有だけではなくて、国家が始める戦争によって、そこで暮らす人々がどれだけ人生を翻弄されるか、数えきれない悲劇が起きてきたかを考えてもらいます。私は、学生に講義する際、できるだけ等身大の学びを重視してまいりました。

本学には、学生が教室の中でだけでなく、直接に現地から学ぶ科目が置かれています。私は、「ベトナム / カンボジア・スクーリング」を何度か企画しまして、学生たちとベトナム戦争の戦跡を訪ねました。そこでは、現地の若者たちとの交流の機会も設けてきました。これらの写真は、そのときの様子です。（スライド③）左側は長崎へのゼミ旅行です。母校の城山小学校にも学生たちを案内しました。女子学生のうちの2人は中国からの留学生です。彼女たちにとっても思い出深い旅だったと思います。また、右側の写真は、ベトナム中部のクアンチ省（激戦地として有名）を訪れたときのものです。ベトナム戦争で一つの民族を二つに分断した、あの北緯17度線を歩く旅でした。ベンハイ川に架かる橋を

スライド③

学生たちが渡っています。橋を半分に色分けした、青と黄色に分けたその境の地点が、南北分断のライン、北緯 17 度線です。

次に、国際学部 1 年生のために実施された平和教育の一端をご紹介したいと思います。昨年、2021 年 12 月 8 日は、太平洋戦争開戦の 80 周年でした。1 年ゼミを担当する先生たちが話し合いまして、被爆 2 世の私が講話をすることになりました。「ナガサキ、語り継ぐ原爆の日」と題しまして、22 歳の時に私の母が実際に被爆したことや、8 月 9 日の長崎の惨状について語りました。また、開戦の口火を切ったアメリカ真珠湾攻撃に至る過程だけでなく、同じ時に日本軍が東南アジアにも侵攻して、現地に多大な戦争の被害をもたらしたことも話しました。学生たちの反応は予想以上で、原爆投下の背景や実相を知り、戦争が語り継がれることの大切さも感じてくれたようでした。この中で、私は、戦争は突然に始まったのではないこと、歴史を振り返れば、十数年にわたって何度も回避する機会はあったのに、そうはならず、また戦争を早く終わらせることもできたのに、そうしなかったこと、失敗の歴史を語りました。

今年 2 月にヨーロッパでウクライナ戦争が始まりました。ベトナム戦争の時と同じように、毎日、映像を通してウクライナでの戦争、途方にくれる現地の人びとの表情が映し出されました。核兵器が使われる危険や、日本の周囲でも、もしかしたら戦争が起きるかもしれないと、不安をかき立てられるようになりました。今、私たちにできることは何だろうと、私たちは切実に考えるに至っています。戦争とは本当に恐ろしいもので、人びとの文化を衰退させ、大切な私たちの精神の自由さえ奪ってしまうものだからです。

本学では、ウクライナ人卒業生のパンコーヴァ・オルガさんと、そのご家族が、同期の卒業生たちの力で、いち早くこの千葉に避難できました。4 月からは、本学の理事長や学長の尽力で、彼女が本学での仕事に就くことも可能になりました。学生たちは、ウクライナ避難民のオルガさんとキャンパスで一緒に過ごし、オルガさんから直接にウクライナの文化や人びとの暮らし、そしてキーウを襲った戦争の話を聞けるようになりました。国連

スライド⑥

を研究する庄司真理子教授との共同の講演会も 10 月に開かれました。

１年生のゼミでは、ウクライナ避難民の方がたへの支援のチャリティーバザーや募金活動をやろうという声が上がりました。7 月と 11 月に、それらは実現しました。そのときのバザーでの写真を一部、掲げています（スライド⑥）。左側の写真は、ゼミの学生たちのバザーの様子です。学内のキャンパスのオープンスペースを使って学生たちがアピールしていました。右側は、オルガさんの息子さんです。

以上、学内での取り組みを駆け足で紹介してきました。最後に、平和な暮らしを守るために、学生と市民が協力し合うこと、地域社会が連帯することは、とても大事なことだと、私は考えています。それぞれの立場を越えて、平和のためにつながる必要があります。その前提として、私たちは、戦争への道を歩まないという決意を新たにしましょう。戦争は、人びとが築き上げた都市も私たちの大切な暮らしも、自由も、そして生きとし生けるもの全てを破壊するものです。被爆国の市民には、核兵器の恐ろしさを語り継ぐ責任があります。

いつも世界へのまなざしを持って、一人の人間として手を差し伸べる気持ちを持ちましょう。その第一歩は身近な外国人と交流し、一緒に楽しむことです。平和の尊さをみんなで再確認し、戦争のない豊かな市民社会を守り、発展させましょう。

本日のシンポジウムでは、興味深い有意義なお話が聞けることを期待しています。どうぞよろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。